"全体主義・ボイコット運動・プロパガンダとオリンピックの関係性
～ベルリン、モスクワ五輪に学ぶ北京五輪～"

Study of Relation among Totalitarianism, Boycott and Propaganda at Three Olympics

1K06B505　　上野　哲明

指導教員　主査　リー・トンプソン先生　　副査 宮内孝知先生

【目的】

昨年開催された 2008 年夏季北京五輪であるが、中国での開催に伴い、1936 年に開催されたベルリン五輪の再来ではないかという懸念が外国紙を中心にみられた。ベルリン五輪はアドルフ・ヒトラー総統率いるナチ党の全体主義的独裁体制の下に開催され、彼らの人種差別政策の下で開催される「平和の祭典」はプロパガンダ五輪であったとして今日では批判的な意見が多い。現在の中国でも、言論の自由や人権が侵害されているとの指摘から、全体主義的と形容されることがあり、北京の五輪招致に伴うボイコット運動が過去のベルリン大会を彷彿させたのかもしれない。

また、ボイコットと政治体制の視点からは、1980 年のモスクワ五輪にも共通点がある。モスクワ五輪では大規模なボイコットが実施されたが、当時のソ連もスターリンから続く全体主義体制下にあった（そのスターリンによる全体主義のソ連をモデルにして建国されたのが、今日の中華人民共和国である）。それに加えて、プロパガンダはソ連のお家芸であったことから、モスクワ五輪もボイコットがなければ「プロパガンダ」として利用された可能性は極めて高い。

このように、ドイツ、ソ連、中国によって開催されたオリンピックは「全体主義」「ボイコット運動」「プロパガンダ」というキーワードで結ぶことができる。本論は、三大会を結ぶ「全体主義」「ボイコット運動」「プロパガンダ」の関係性をベルリン、モスクワ大会、北京大会において考察することが目的である。

【展開】

第一章では、オリンピックが国際主義を掲げる一方で、ナショナリズム感情をも引き起こしてしまうという「オリンピックの二元性」ついて論じる。第二章では、「全体主義」に焦点を当て、全体主義への理解を深めた上で、全体主義におけるプロパガンダの役割を考察する。第三章では、ドイツとソ連のオリンピック開催に伴い生じたボイコット運動について論じると共に、開催されたオリンピックのプロパガンダ性について考察する。第四章は、第三章の北京大会における考察であるが、中国が全体主義ではないという点が異なる。そして第五章にて、先にモスクワ、ベルリン大会のボイコット運動、プロパガンダ性を全体主義の視点から考察した上で、北京大会のそれらとの関わりについて論じる。また、オリンピックにおけるそれらの関係性を一般化して結論とする。

【結論】

オリンピックにおける「全体主義」、「ボイコット運動」、「プロパガンダ」の関係が次のように一般化できる。全体主義におけるプロパガンダは外側を向く、なぜなら外側からは批判が多いためである。オリンピックによるプロパガンダも同様に外側を向き、それに対する外側からの批判はボイコット運動である。また、内側に対してはプロパガンダではなく、指導者イデオ

ロギーを再確認する教義となる。なぜなら、全体主義のイデオロギーはナショナリズム感情が重要であり、内部ではメディア統制がとられているため相反するイデオロギーが締め出されるためである。そしてこれらの内外へのオリンピックの役割はちょうど、普遍的なオリンピックの二元性に帰結するのである。